

半世紀前の思い出・点描

元顧問 今中 啓旦

私が高津高校に勤務したのは、1957年4月1日から1981年3月末までの24年間である。その間ずっとハンドボール部の顧問であり続けた。私は英語担当の教員である。それまでは、ハンドボールとは全く縁のない生活を送っていた。足を使ってゴールに蹴り込むのが「蹴球」つまりサッカー、手でシュートするのが「送球」つまりハンドボールである、というくらいの知識しか持ち合わせていなかった。実際にプレイしたことは一度もなかった。

では、そんな私がどうしてハンドボール部の顧問になったのか、その事情はこうである。高津に赴任した4月、2年生の英語の授業を終えて廊下に出ると、当時ハンドボール部のキャプテンだった石崎寿夫君が近づいて来て、唐突に「顧問になってください」。その時の私は24歳。石崎君にしたら、この若くて大きな声で話す元気そうな教師ならいいのではないか、というくらいの思いがあったのだろう。そこで私は一瞬躊躇したが結局引き受けてしまったのである。いずれはどこかのクラブ顧問にならねばならないと言われていたという事情もあった。授業と授業の合間のわずか10分間の休憩時間中での、廊下での立ち話の即断であった。

その年の夏休み中の合宿の厳しいトレーニングは忘れられない。先輩が入れ替わり来校して指導するのである。厳し

い基礎練習である。歯を食いしばり顔をしかめてがんばる選手たち。小休止の時間には、じっと涙を堪える者がいる。所かまわず寝転ぶ者も



いる。合宿中の教室に戻ろうと階段を登るにも痛む脚を引きずり顔を歪める者もいる。先輩は、後輩たちを鍛えて、より強いチームにしたい一心に、入れ替わり立ち代わり来校してくれるのである。しかし、現役生の心中を推察するに、もう堪忍してくださいよ、と叫んでいるように、その苦渋に満ちた顔、顔、顔から伺い知ることができる。ハンドボールの実体験がなく、ただ見守っているだけの顧問である私の一番辛い部分である。夏の教室での宿泊環境は劣悪である。教室の床にごさを敷いて、その上で布団や毛布にくるまってざこ寝をするのだが、真夏の教室は蒸し暑い。私などはなかなか眠れない。それでも、くたくたに疲れている選手たちは、すぐに寝入ってしまう。合宿中の唯一の楽しみである食事は、地下の学校食堂でクラブごとに固まっていた。

そんなしんどい合宿中、私がたまたま一瞥し、今も記憶に残っている一つのシーンがある。それは、教室で皆がゴロゴ

口寝転がりながらくつろいでいる時、ひとり教室の腰板にもたれて、両脚の上に教科書を開いている者がいた。キャプテンの石崎君の姿だった。えらいヤツだなあ、と思った。彼はキーパーなので、練習も集中的に特訓を受けていたので、疲労も極度に貯まっていたことだろうに、である。

合宿が明けて、練習が再開される頃には、皆んなが元気澁刺、身が軽くなり、軽快に跳び廻るのだから不思議である。それだけ全身の筋力が強くなり、技術も向上しているためだろう。ところが、他校との対校試合となると、事情はきびしい。相手も鍛えられている。当時は、ハンドボールでは、公立校が強かった。強い学校にはハンドボールが専門の顧問が指導に当たっているところが多かった。高津では、技術指導はすべて先輩頼みであった。それでも、高津は強かった。府内では、いつもトップグループにいた。近畿大会にも何度か出場した。試合は土曜日・日曜日や休日に行なわれるので、選手は辛かったことだろう。しかし、どの試合にも必ず先輩たちがやって来て、指導・助言・声援してくれた。有り難いことである。公式戦には専任の教員の付き添いが義務づけられていたので、試合のたびに休みの日がつぶされることは、私には本当に辛いことではあった。ある年の女子ハンドボール部の公式戦に、いつものように付き添って行った。試合は阿倍野区にある大谷高校のグラウンドで行われた。その試合にも、男子も女子も両方の先輩たちがたくさん来てくれていた。試合中も、選手の一挙手一投足

に声援・助言が賑やかに乱れ飛んでいた。突然、その試合のレフェリーが試合を中断させて、こちらに向かって一喝した。「高津ベンチ、やかましい！」。その時のあのレフェリーの赤い顔と大きな声。今でも忘れられない。

これには後日談がある。1981年4月に、前述したように、私は高津を退職した。大谷女子短期大学英語英文学科へ転出したのである。48歳だった。当時のキャンパスは、大谷高校と隣接していた。正門を入るとすぐ高校のグラウンドがある。ある時、たまたま、あの時のあのレフェリーが、ハンドボール部員の指導をしているのが目に入った。あの試合の相手校の校名も、そのスコアも忘れてしまっていたが、あの顔は忘れられない。事務室で名前を確かめた。それは保健体育科の木村方紀先生であることが判明した。私よりだいぶ若い先生である。後日、高校へ出向いて行って、木村先生にその件について話すと、「そんなこと、ありましたか？」と言って頭を掻きながら大笑いされた。

強いチームには良い指導者がいる。高津は顧問が素人であったが、先輩が代行して指導してくれた。しかし、ついに高津にもハンドボール部の先輩で、現役時代はポイントゲッターとして活躍した太田寛人君が、母校の保健体育科教諭として赴任し、クラブ活動ではハンドボールの指導に当たってくれている。とりわけ、女子ハンドボール部は強くなっていると聞いている。嬉しいかぎりである。しかし、最近は教員の勤続年限が厳しく言われ、この太田先生も転出とのことで

ある。

最後に、今中道夫君について言及して終わりにしたい。昨年の夏に、川上会長から電話があり、「今中道夫先輩を覚えておられますか。同窓会へ出席されて、今中先生のことを尋ねておられました」とのことだった。私と同姓だし、私が担任した学年の生徒だったから、もちろんよく覚えている、と答えた。私は生徒から「ケイタン」と呼ばれていた。幼少からの呼び名は「ヒロアキ」であるが、高津ではこのように正しく呼ばれたことは一度もなかった。私は「ケイタン」と呼ばれることは仕方がないことではあるが、今中道夫君までもが、からかわれ

て「ケイタン」と同級生から呼ばれていたのである。気の毒だと言おうか、申し訳なく、すまない気持ちでいっぱいであった。川上会長からの電話で瞬時にそのことを思い出したのであった。道夫君にとっては、迷惑なことであったにちがいない。

高津で私は5回卒業生を送り出し、最後の6回目のサイクルでは、1・2年生と持ち上がった後、高津を去ることとなった。その間、ハンドボール部とも関わり続けた。思い出は尽きることはない。

(2013年3月記)

[会報 第9号(2013年5月)掲載]

